

牛市場の開かれる隣町の本山は、まだニキロ先だ。市場に行くには土手をおり、田んぼの中の畦道を通って県道に出なくてはいけない。その道の往復は篤彦には長すぎる。行けるところまで行ってみようかと迷っていると、それを見透かすように、香川はんが言った。

「よっしゃ、ここでいったんおサラバじゃ。今夜はぎおんでお客するけん、あつ坊、お前も来るんぞ。お母はんにええ魚を沢山、仕入れとくよーに言うといてくれ」
県道に出た角で、篤彦は香川はんと牛を見送った。車が通るたびに乾いた道路に土煙があがり、牛の歩みは何度も止まったが、二つの影はゆっくりと動きながら見えなくなった。

篤彦には父がない。

「なんで、ぼくにはお父さんがおらんのか？」

母にも、祖父にもずっと訊きたくて仕方がなかったが、その質問は留めおかれたまま、時だけが流れていた。

父がいたなら、香川はんと同じくらいの歳かも知れない。しかし、目の前の香川はんは、なぜか父のイメージにはつながっていかなかった。

その晩、夕方になるのを待ちかねて、篤彦はぎおんの勝手口から座敷に回った。出てきた和代に、香川はんに呼ばれて来たことを告げ、座敷に行った。

廊下の突き当たりにある古ぼけたミシンと、その下の赤色の玩具のピアノに見覚えがある。初めて母と挨拶に来たとき、夕希ちゃんがそのピアノで「花嫁人形」のメロディーを弾いてくれた。奥にあったあのときの部屋を思いだし、足が向かった。

ふすま戸に指が入るくらいの隙間ができています。のぞき込もうと恐るおそる顔を

近づけると、鼻の先で白粉と置のい草の匂いがした。中から、泣きながら突っかかるような声と、それをなだめようとしている男の低い声がした。女の声は夕希ちゃんだった。聞いてはいけないことを聞いてしまったという後悔と罪悪感が篤彦を責めた。それをふり払うように座敷に急いだ。そこで寝ころんで休んでいた香川は人の姿に、篤彦はまたまごついた。

鳥打ち帽の代わりの禿げあがった額、脚絆を外した浴衣姿、今朝とは別人の香川はんだ。

「おう、来たか」親しみのこもったしゃがれ声だけは同じだ。枕元にビール瓶が並んでいる。

「あの牛、どうなったん？」

「機嫌ように買われて行ったわ。これ見い」

香川はんは、床の間においた財布代わりの腹巻を引き寄せ叩いて見せた。

そこへ冷たい蜜柑水を持ってきた和代が、「いらっしやいませ」とおどけた挨拶をした。それから「葉子、来てるんで」と耳元で囁やき去っていった。和代のわざとらしい物腰や、夕希ちゃんの部屋の悩ましい気配……、篤彦はこのぎおんそのものが、子どもが足を踏み入れてはいけない場所のように思えてきた。

香川はんは身を起こすと、むき出しの脚を畳の上に投げ出して、内側に曲がっている足首のあたりを自分で揉み始めた。

「今日は朝からほんまに沢山歩いたわ。ここに全身の力がかかって、大変痛いんじよ」

ワニに噛まれたという踵は、肉の塊のように盛り上がっている。篤彦の目は黒く固まった傷跡に釘付けになった。

「気色悪かるが?」「ウン、一寸な。それより、指の先まで酔うとるみたいに真っ赤や」
「ホ、足が酔うとるか。そらうまいこと言うたわ。そうや、他所では人に見せん傷を
見せたついでじゃ。いっちよ、あつ坊に戦地でのワシの話をしてみようかいの」
戦争の話なら、祖父と為爺やんがしていた中国での捕虜の処刑のことを聞いて、
吐きそうになったことがある。「今日、来たのは、やっぱりマズかったな」篤彦がそ
う思い始めたときには、香川はんがもう口を開いていた。

「ワシの隊が送られとったのは、ニューギニアの南の小さい島じゃった。軍から配
られる食い物はスズメの涙ばでいつも腹がへっとった。木の根でも野ねずみ、何で
も食いよった」

「ねずみ食べられるん?」

「何ぞ口に入れな死んでしまうがい。じゃが、ワシあ、コーモリだけは終いまで食え
なんだ」

香川はんはキセル煙草に火をつけた。篤彦は立ち上がって、部屋の電気をつけた。

「あつ坊、立派に人間や言いよっても、様ない位、すぐ一巻の終わりになるんぞ。
夕べ、隣で寝よった戦友が、朝になったら動かんようになってるんじゃけに、の
う……」

「黙って死んどるん?」

「そーよ。ま、聞かんかい。食い物をさがしてき迷うとる内に、ワシは現地人の畑
へ来とった。芋でもなかるうかと泥を掘りよったとき、大っきよい音たててグラ
マンの敵機が飛んできた。どうか逃げんらんと思ってたが、この足じゃ。走ろう思
うても、何様、足が前に出やせん。前にも後ろにも、あれほど情けないことはなか
った……」

話を聞きながら、篤彦は自分の脚や腰の関節がすべて、音もなく軋んでいる気がした。

「上官に、常々、敵に背を向けてはいかんと言われとったが、何より、ワシは後ろから狙い撃ちされるのが嫌じゃった。銃は持つとるが、敵機を撃つ余裕などありやせん。ワシはもうヤケクソで畑に大の字に寝転んだんじゃ。グラマンが急降下したとき、爆音で鼓膜が破れそうじゃった。もうこれでもまいじゃ思うて目をつぶろうとした。その一瞬、ワシはパイロットと目がおうたように思った」

香川はんは、いつの間にか灰の落ちたキセルを手握りしめている。

「爆音が遠のくを感じ、目を開くと機体は見よる間に小そうになつていった。生きたる！ その瞬間、ワシは知らん間に手を合わせとった。一寸先は地獄じゃ言うが、その反対もあるつちゆうことかいのう」

篤彦には、目の前にいる香川はんの存在も、その話も夢の中の出来事のようにだった。必死で逃げようとしても足が動かず、自分の身を投げ捨てた香川はんの無念と恐怖。もしも自分だったならと考えようとしたが、篤彦の想像を超えていた。そのことは口にせず、別のことをおずおずと問いかけた。

「そのパイロット、香川はん見て自分のお父さんのこと、思い出したんやろうか？」
その問いに、初めて笑い声がおこった。

「コラ、あつ坊、何を言よる。その時分のワシや、まだ若者ぞ、十年ば、しかたつとりやせんだろが」

「あ、そーか」篤彦はきまり悪く笑った。

「あんとき、何で撃たれなんだのか、考えても考えてもワシにはわからなんだ。」

泥塗れで、空から見たら日本兵かどうかわからなんだんかも知れん。理由はどうでも、今、こなんして生きておるんが不思議でならんのじゃ。ほんまに、死んどった命を一つ捨うたみたいなもんかのう。ワシは、今でも、あの日の空を思い出す。空があないに青うてけっこいと思うたことはなかった……」

香川はんは煙草に火をつけ、うまそうに煙を吐き出した。

「あれ以来、ワシは旗っちゅう旗がみな好かんようになった。日の丸も、星の沢山はいつとるアメリカの旗もみな好かん。ほんまに様あないわい。あななことしくさつて、ど阿呆じゃ、ど阿呆じゃ」

誰に言うともなく、吐き出すように言った。

篤彦は、南の島の青い空と芋畑を思い浮かべた。若い香川はんが大きな耳を太陽の光に赤く透かせ、黒い顔を空に仰向けている。眼だけが清んでいた。

その想像を、香川はんの声がさえぎった。

「あつ坊よ、酒が温うなつてももうとるが、お母はんは氷の力チ割もろうてきてくれ」

篤彦の頭の中で、まだジャングルと戦闘機と香川はんが一緒になっていた。そのまま台所へ向かい、廊下の角を曲がろうとしたとき、玄関の方から聞こえてきた音がみ合うような声で我に返った。上がり框で争っているのは、和代と見たことのない若い女だった。

「ここのユキとかいう子に伝えといて。あたしの彼はぎおんの子のことは遊びや言うてます」

「あんた誰なん、名前も言わんといきなり」

女は和代には答えず、挑むように言った。

「その首飾り模造真珠ね。安物で済んでええね」

篤彦は、その女の目や言葉の端々に、夕希や和代への露骨な蔑みを感じて、柱の陰から睨んでいた。夕希の馴染みの客に関わりのある女のようにだが本人は部屋から出てきていない。

「あんたこそ、ウチらに恠気やこする暇あるんなら、その最低男の番でもしより」
今までおとなしく聞いていた和代が返した言葉に、女は気色ばんだ。

「あー、やっぱり、何もかも下品！」

「何がやっぱりな。もう一遍、言うて！」

そのとき、篤彦は葉子がどこかで母の姿を見ているのではないかという思いにつつまれ、部屋の中を見回した。

「この人、皆、その首飾りと同じで安物よ、安物！」

和代が手を振り上げたとき、廊下の奥から突然、現われた好恵がその腕をつかんだ。

「好恵さん、放してつか。こなたな小便くさい小娘に侮辱されて情けなかるうがな」

「止めとき、和代さん！」

若い女の言葉の意味するものがおぼろげにわかった篤彦は、和代を抑えている母が無性に腹立たしく、哀しくなって腰の辺りに身体ごとぶつかっていった。

(以上10月3日放送分)